

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	上利 政彦
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation)			
創造の技術 ルネサンス模倣論とミルトン			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授 今林 修		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 吉中 孝志		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授 大地 真介		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授 大野 英志		
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	安田女子大学・名誉教授 中川 憲		
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>英国ルネサンス期における模倣論は、万物照応の理論に基づいたテキスト創造という文芸論的視点で論じられてきたが、本論文では、キケロの古典模倣論の議論が英国ルネサンス期において絶えることなく連続する事実を辿り、模倣論の実践と創造の技術を文献学的手法を用いて詳細に考察している。</p> <p>本論文の構成は、「はじめに」、第1部 (全8章)、第2部、「おわりに」、からなる。</p> <p>「はじめに」では、イデア論に基づくキケロの模倣論、セネカの模倣と読書論、クウィンティリアヌスによる模倣モデルの具体例とその成果、そして模倣と凌駕が論じられる。自然を模倣した結晶としてテキストが生まれ、次にそれをモデルとして作者は、そのテキストに施された技術を模倣する、即ちモデルを通じて更にイデアを見ることになる。筆者は、模倣論が技術的になる理由の大半がここにあると指摘する。クウィンティリアヌスはギリシャのモデルを模倣する場合、語彙、修辞法、文章構成などの技術への注意を促す。模倣における言語技術は、後の近代に至るまで大いに論じられ、英国はルネサンス期に大陸からその影響を受けることになるが、特にアスカム、シュトゥルムに顕著であると述べ、本論に入る。</p> <p>第1部では、英国近代初期の創作論は模倣論を中心に展開し、一つないし複数のモデルを決めてそれを模倣し、独創的なテキストを創り出す、ここにモデル、模倣、テキストの関係が生じると述べ、16世紀から17世紀に英国で模倣論を実践した計11人の文人の著作が、出版年代順に扱われる。近代に入って英国の文芸批評は大陸の影響を受けつつ、原理的にキケロ主義を踏襲する。当初アスカムやシュトゥルムはラテン語教育や紳士教育の観点から模倣の言語操作を教えたが、エリザベス朝を代表するシドニーの模倣論において芸術は新プラトン主義的高揚を見せて絶頂に達する。そして次のジョンソンにその高揚の影響が残るが、両者にプラトンの自然が忘れられた訳ではなく、ジョンソンによってギリシャ語に対応してラテン語を洗練する必要が叫ばれ、模倣によるテキスト創造のため英語の洗練が緊急の課題となる。ドライデンは、ジョンソンに続き英語の洗練と古典語の英語訳の意義を強調し、17世紀内乱期から王政復古期 (1642-1660) を経て新科学時代に至る英国模倣論を大きく纏め上げたと筆者は主張する。</p> <p>第2部では、ミルトンの『失樂園』(1667)における古典叙事詩の継承とキリスト教教義を主題とする新しい叙事詩への挑戦が模倣論と創作技術の観点から文献学的手法を用いて精緻に論証される。モデルとするヴァージルと競い凌駕するために、ミルトンは「航海」のモチーフを利用し、その上で、古典叙事詩の英雄の役割をサタンに、新しい叙事詩の英雄の役割を人 (アダムとイヴ) に振り当て、</p>			

新しいキリスト教叙事詩を書き上げたとする。ミルトンは、サタンに関しては、模倣論に拠って伝統的英雄を描き切ると同時に、アンチ・ヒーローを作り出すという点でこれを否定し、アダムとイヴに関しては、かくも対照的な、これまで成し得なかった新しい英雄像を創造したと論ずる。

「おわりに」では、自然が、一方でプラトンのアイデアを志向して真のテキストを創ろうとする際の思考と観察の対象であり、他方では新科学時代における観察の対象であったと述べ、新科学の自然がプラトンの自然を拡大し深化させ、作者はアイデアにより近づくことができたと結論を述べる。

本論文は、ミルトンの『失樂園』解釈に若干の疑念を生じさせる箇所もあるが、総じて、英国ルネサンス期における古典模倣論の展開を精緻に辿ったうえで、新科学時代に相応しい模倣論、時代に即応したテキストの創造及びそれを支える技術の実相を、特にドライデンの理論を深く考察することで解明した点で高い評価に値する論考である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)